

明治維新150周年～武蔵国から埼玉県誕生へ

第5回 埼玉県を"賑わした"人びと

ぶぎん地域経済研究所 取締役調査事業部長 松本 博之

本シリーズも最終回となりました。これまで幕末から埼玉県誕生までのいきさつをお話ししました。今回は、幕末から明治維新後の時代で、様々な分野で県内とかかわりのあった人物を選んで紹介することにします。

皇女和宮 中山道に行く 街道は大混乱に

皇女和宮の將軍家への降嫁は、幕末期に起きた様々な出来事の中でも北武蔵（埼玉県域内）での最も大きなイベントで、大行列が通過した期間は中山道の各宿場町を中心に大混乱となりました。

一行千数百人の人々を引き連れた、行列には、京都方から1万人、幕府方から1万6千人が加わりました。その他に持参した品物を運搬する人足を入れると3万人余りに膨らんだと言われています。

その行列の長さは約12里（50km）で、通り過ぎるまで4日かかったと言われていました。しかしながら行列は延々と50kmが数珠つなぎの行列ではなく、先行して街道筋や宿泊場所を検分する先触れ、警護や和宮の行列などに分かれて中山道を進んで行きました。文久元年（1861）10月20日に京都を出発し、約530キロの道のりを23の宿場に泊まり、11月15日に江戸に入るという25日間の日程でした。

和宮の一行は、そもそも、「東海道ではなく、なぜ、中山道を選んだのでしょうか？」その



皇女和宮桶川本陣遺構（案内）

理由を紹介したいと思います。最も重要視したのが、当時の政情不安や沿道の治安です。幕府が最も恐れたのが過激な攘夷派による襲撃でした。その点、東海道に比べ人通りの少ない中山道の方が警護に適し、一般の往来の妨げになる影響も小さいと考えられたのでしょう。また大きな川がなく川止めのリスクも少なく、日程も読みやすかったこともあり。変わったところでは、婚姻に縁起が悪い地名が東海道には多かった点もあったと言われています。

碓氷峠を越えた行列は、下野国から武蔵国に入ってきます。行列の警備は、各行程で以下のように各藩が担当しました。

安中～本庄：上野高崎藩、武蔵岩槻藩、
武蔵岡部藩
本庄～桶川：武蔵忍藩
桶川～板橋：備後福山藩、下総古河藩

11月11日に上野国から武蔵国に入り、本庄宿、翌日は熊谷宿、13日は桶川宿と埼玉県内で3泊しています。県内での和宮の細か

な動静は以下の通りでした。

- 11月11日：高崎～倉賀野○～新町～本庄◎
 - 11月12日：深谷○～新堀村～熊谷◎
 - 11月13日：吹上村～鴻巣○～桶川◎
 - 11月14日：上尾～大宮～浦和○～蕨～板橋◎
- ：昼食、◎：宿泊、無印：小休止

史料が多く残っている桶川宿の様子を垣間見ますと、村々への人足と馬の徴発をした実態がわかります。

津波のように近づいてくる行列に、桶川宿は戦争のような大混乱となりました。板橋宿までの宿は小休止だけで直行することになっていたため、桶川宿では全部の人馬の乗り換え、荷物の継ぎ送りをしなければならなかったからです。このため板橋までの間の上尾、大宮、浦和、蕨宿の助郷・加助郷の人馬はすべて桶川に集められました。臨時の加助郷も定められ飯能、所沢からも徴発されました。その人馬数は、人足3万6,450人、馬1,799頭にのぼりました。通常、参勤交代で集められる人足は3,000人程度です。その10倍を超す一行の夜具布団、膳や椀は他の宿場から、その人数に見合うように借用料を払って調達しました。宿泊当日には、旅籠はもちろん、商家、農家などすべての家が宿所として徴発されました。農民の負担は、莫大なものとなりました。

11月13日の桶川宿では、桶川到着が午後2時。そして午前2時には最後の宿泊地の板橋に向けて出発していきました。一方、和宮一行も休泊した地で、謝礼として多くの品を下賜かされました。現在でも食器や草履などの履物が県内に残されています。

※助郷とは…幕府公用の大行列などに当該宿場だけでは提供できる人馬が足りない場合、近隣の宿場や村等から補助的に人馬を提供させる制度

芹沢鴨 本庄宿で大篝火

幕末から明治維新を舞台とした歴史小説やドラマの中で欠くことができない組織の一つが、新選組です。彼ら隊士の生き様、死に様には多くの歴史ファンが魅了されています。隊士の中でも、問題児、変人と描かれることが多い、後の新選組局長芹沢鴨の本庄宿でしかしたとんでもないエピソードを紹介したいと思います。

文久3年(1863)2月、当時の将軍、徳川家茂の上洛にあわせて、将軍警護のために浪士組(新選組の前身)が作られました。もともとは尊王攘夷論者である清河八郎の発案で、攘夷を断行するため集められた人たちで、腕に覚えがあれば、身分や年齢を問わず、前科者であろうが農民であろうが参加できました。隊員の顔ぶれを見ますと芹沢鴨の他、当時は無名だった近藤勇、土方歳三、沖田総司、永倉新八、山南敬助、藤堂平助など、後の新選組の主要メンバーが揃っています。

一番隊から七番隊まで七組に編成されていましたが、芹沢は、各隊から離れて「取締付筆頭」となり各隊長と同格の役でありながら、別格な処遇をされていました。

芹沢鴨は、神道無念流の免許皆伝で太刀筋は全員が認めるところです。しかし性格は短気、わがまま、乱暴で、その上に大酒飲みとしまして、怒りだしたら手が付けられない男でした。

浪士組234人は事件の2日前、2月8日に江戸小石川に集まり、中山道を通って上洛していったのでした。初日は蕨宿に泊まり、次は本庄宿に泊まる予定となっていました。そこで当日の宿割り役となった池田徳太郎と手伝い役の近藤勇が、先乗りして諸隊の宿割り



本庄宿田村本陣の門
(この門の前で篝火をしたと言われている)

をしたのですが、よりによって芹沢鴨の宿舎の手当を失念していたのが、事の発端でした。

夕方、本隊が本庄宿に着き、続々宿屋へ入っていく中で、芹沢の宿が無いことが発覚します。芹沢が烈火のごとく怒ったのは、目に見えるようですね。失態を演じた池田と近藤勇が平謝りに謝り、土下座に行きましたが、へそを曲げた芹沢は承知しません。

「宿がなければ外で寝る。暖を取るから、篝火を焚け・・・」と部下の新見錦らに命じたそうです。

近くの古い小屋を壊すなど手当たり次第に木材を集めさせ、本庄宿の真ん中で焚きだしたのです。今で言うと、本庄宿の真ん中で“キャンプファイヤー”と言ったところでしょうか？ 火の粉は風に飛ばされて、宿場に雨あられのように降り出しました。最悪の場合、宿場全体がまる焼けとなる事態を察知した宿場の人たちは、水桶を持って屋根に登って火を消す始末となったのです。ビックリした宿役人が止めようとすると、役人の高圧的な態度が芹沢を更に燃えさせました。持っていた鉄扇で役人を殴り飛ばしたとも言われています。

結局、取締役として幕府から派遣されていた山岡鉄舟の取り成しによって、芹沢は、渋々

火を消しました。ようやく宿の手配ができ、芹沢は宿へ入っていったのです。

この事件が、後の新選組での芹沢一派と近藤一派の確執の原因であったとされています。

多くの新選組関連の小説に書かれている本件ですが、もともとは永倉新八が大正4年(1925)77歳で亡くなる前に書いた「新撰組顛末記」(原題:新撰組永倉新八)に書かれた「芹沢鴨の大焚き火事件」です。ただし地元の史料や伝承はなく、信ぴょう性が薄いとも言われていますが、芹沢鴨だったら「あるある」と納得できるところでもあります。

治政は県民のために 不世出の県令 白根多助



二代県令 白根多助
(明治6～15年)

埼玉県誕生後にやってきた初めての県令(現在の県知事に相当)は、薩摩藩出身の40代の野村盛秀です。野村と同時に参事(県の次官)となったのが長州出身の白根多助でした。彼らは相談の上、急激な改革を避け、

すべてに漸進主義をもって治政することとしました。これは、白根が、野村の後を継いで第二代県令となった時も受け継がれ、白根が県治の基礎を築いた名県令と言われた大きな要因でもあります。

「埼玉県行政史」によれば、県令の野村と白根が埼玉県の行政について「埼玉県は極めて難治の県である。」と考えていたと書かれています。当時は、「埼玉の地は東京に接し、風俗は軽浮で男は耕作を怠り、女は紡織を怠

けた」という散々な評価であったとされています。

さて白根の最初の実績として特筆されるのが師範学校と医学校の設置を進めたことでしょう。政府の文明開化策にすぐさま対応するため、白根は師範学校と医学校を開設して教育の普及に努めています。特に医学校は全国に先駆けるかたちでの設置となりました。しかしながら明治8年（1875）に開設した医学校は、「県の予算を使いすぎる」との県議会の反発に遭い、また「東京大学医学部に依頼して研究しむるに如かず」とする意見に押されて、明治12年に廃校となってしまいました。今から考えると非常に残念なことですね。

当時は各県令が明治政府（中央）の顔色をうかがいながら政治を行っている時期と言われています。しかしながら白根は「人民の利（当時は土農工商の階級差を無くすという政府の方針のもと民衆はすべて人民と呼ばれていました）になることは良し、そうでないことは悪いこと」をモットーとしていました。

地租改正が実施された明治9年、明治天皇は東北巡幸の際に幸手（現在の幸手市）に立ち寄られました。先導役を務めていたのが埼玉県令の白根でした。その時に明治天皇は、白根に対して地租改正の影響を尋ねられたそうです。

そこで彼は明治天皇に「金納は、手間が省けて確かに便利になりました。しかしながら農民が懸命に米を作っても取り入れになる時期は秋です。この時期に一齐に米が売られるとともに、政府はその金を一齐に吸い上げてしまいます。そうしますと米価は下がり、貨幣の量が減って農家も商人も両方が困っています。収税の時期を複数回に分けて欲しいと

思います。」と農家の窮状を率直に申し上げました。この白根の言葉が明治天皇の御心を動かして、政府の分割収納が始まったと言われています。

このような白根の政治姿勢に対して、当時の内務卿大久保利通は、こんな言葉を残しています。「県令の民情を説くや、その疾痛痾痒皆、己に有るがごとくに見ゆ、実に人民の代議士ともいふべきだ」と言わしめました。

次に人材の登用・育成についても、白根は積極的でした。清浦奎吾（のちの内閣総理大臣）、横田国臣（のちの検事総長）や加藤政之助（のちの県会議長・衆議院議員）らを見出して県内の学校行政の基礎を作らせたのは有名な話です。また明治12年の郡長設置においても県内から有能な人材を抜擢し、その人たちの多くがその後の埼玉県の政・官・財界の中心となっております。

また県庁官吏の採用に際して、コネ採用を廃止して、ことごとく埼玉県民採用をしたのは、当時は他県では、見られないことでした。

とことんまで現場で情報を収集し、県民本位の治政を行った白根多助、彼の白馬に跨った姿は、県内の至るところで見られたと言われています。明治15年3月15日、県治の基礎を築き今なお名県令として県政に名を残す白根は、在任8年半、現職のままこの世を去りました。

明治維新150周年をもとに企画しました本シリーズも今回が最後となりました。筆者としては幕末から明治維新、埼玉県誕生までに歴史を改めて勉強する良い機会が得られたことに喜んでいきます。今後も歴史分野での連載企画を検討していきたいと思っておりますので、ご期待ください。（了）